

付論Ⅱ 三次元計測による香芝市狐井城山古墳出土埴輪の再検討

香芝市狐井城山古墳は、墳丘長約140mを測る古墳時代後期の大型前方後円墳として著名である。顕宗陵や武烈陵に比定する意見があるように（塚口1995・1998・2020、白石1999・2011）、後期の前方後円墳としては王陵級の規模を誇る古墳として注目されてきている。

墳丘は城山古墳の名の通り、後世に城郭に改変されており変形が著しい。墳丘部へは発掘調査がおよんでおらず、正確な規模や形状については明らかになっていない。発掘調査が実施されているのは西側の外堤のみであるが、外堤上にも後世の客土が厚くおよんでおり、埴輪列や葺石等の外表施設は未検出である。今回、報告するのは香芝町教育委員会（当時）が実施した西外堤における第4・5次調査出土、および表面採集による埴輪片である。Fig. 34は、香芝市教育委員会所蔵資料のうち、系統や年代の位置づけにおいて重要となるものを抽出し、三次元計測により図化したもので、いずれも円筒埴輪片である。

1・2は胴部片で、外面には二次調整のB種ヨコハケが施されるが、2のヨコハケ工具は、ハケメの隆起が不明瞭で板ナデ状を呈する。ヨコハケの下に斜め方向のユビナデが散見できるが、タテハケは観察できず、ユビナデ後に直接、ヨコハケを施しているものとみられる。内面調整はナデで、ハケメの施工は確認できない。1の突帯は、断面台形で突出度があり、中期的な突帯Ⅰ群である。

3～7も胴部片であるが、外面はいずれも一次調整のタテ・ナナメハケ、内面はユビナデ調整である。3・4・6には各一カ所、円形透孔の一部が残存する。突帯はいずれも、断続ナデによって貼付ける突帯Ⅱ群とみられ、4や7ではヨコナデからはみ出したナデ付け時の擦痕が確認できる。5～7は破片中に2条分の突帯が遺存しており、突帯間隔は5が10.0cm、6・7が9.5cmを測る。5の内面下端付近には積上げの休止位置を示す明瞭な粘土紐接合痕が残るが、積上げ再開位置には、粘土紐接合強化のためのヘラ刻みを施している。

8～12は、底部および底部付近の破片である。8はわずかに底面が遺存しており、底部高は9.0cmを測る。突帯はいずれもヨコナデ調整を省略するいわゆる無調整突帯であり、底面が残存しない9～12も一条目突帯付近の破片であることが判明する。8～10では突帯上に板オサエ痕が明瞭に確認できるが、貼付時のユビの単位はヨコ方向への動きが確認できることから、断続ナデによって貼付けられた突帯Ⅱ群と判断できる。ただし、後述する11・12と比べてナデ付け痕跡が視認しづらいことから、あるいは簡易なヨコナデ調整が加えられている可能性もある。また9では、突帯に対応する位置の内面に板状工具の圧痕が集中しており、突帯の板押圧に対応した支持具の圧痕の可能性もある。

一方、11・12は一見すると、典型的な断続ナデ技法Bのようにもみえるが、上下のユビで粘土紐を掴まんだ際の稜が遺存せず平坦面が形成されていることから、8～10と同様に断続ナデによる貼付後に板押圧が施されているものと判断できる。9～11には突帯上辺に、8では底部外面下端にL字形工具の擦痕が残っており、突帯割付技法（凹線技法）が用いられたことが判明する。

以上のように、狐井城山古墳の埴輪は典型的なV群円筒埴輪で構成され、かつその系統もⅡ群の無調整突帯を含むことから、Aa類に属すものと判断できる。ただし、微量ながらB種ヨコハケや突帯の割付技法が残存する点、無調整突帯も典型的な断続ナデ技法Bではなく、板オサエによる整形技法が省略さ

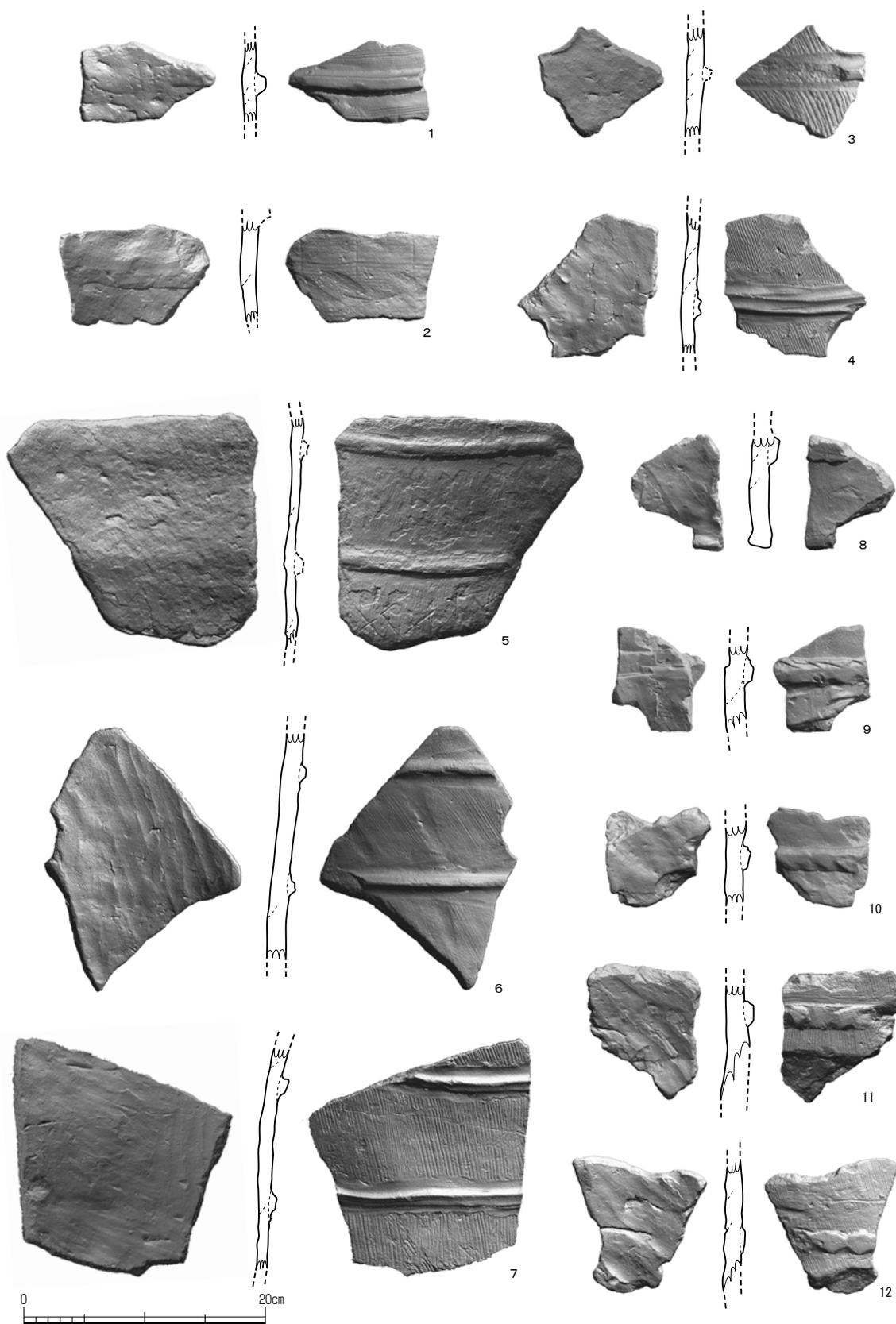


Fig. 34 狐井城山古墳出土埴輪の三次元モデル画像 1:5



Fig. 35 下田東遺跡井戸SE74転用の大型円筒埴輪 1:8

れずに施されることから、V期新相には下らず、V期中相に位置づけるのが妥当と考えられる。ただし、5・7の復元胴部径は30cm前後に達すること、さらには狐井城山古墳が大型の前方後円墳であることを踏まえると、これらの資料はいずれも多段構成の大型品である蓋然性が高い。古い技法が残存する状況は、大型品の保守的な製作状況を反映したものである可能性もあろう。

なお、5の外面には斜格子状の線刻が残る。波状文ではあるが同様に胴部に線刻を施す例は、下田東遺跡K地区井戸SE74井戸枠転用埴輪にも散見される。下田東遺跡井戸枠転用埴輪は底部・胴部径が40cmを超えるものを含む大型品のみで構成され、全形が11条12段となることが判明するものがある。外面調整はV群特有のナナメハケを主体とし、突帯は突出度の高いI群と断続ナデで貼付けるII群とがあ

る。狐井城山古墳から約800m北という遺跡の立地状況からも、狐井城山古墳のために用意された埴輪が転用された蓋然性が高い。

狐井城山古墳については、これまで埴輪にもとづいて古墳時代後期という漠然とした年代観が与えられてきたが、今回の埴輪の再検討により、その年代はV期中相（TK47～MT15型式期）に絞り込むことが可能となった。また、埴輪の系統も盆地南部における主系統であり、古市古墳群とも親縁性のあるAa類に属すること、加えて王陵級の古墳にふさわしい大型品の供給を受けている可能性も指摘することができた。おなじく、王陵の可能性が推測される北花内大塚古墳では、狐井城山古墳と同様に外面調整にB種ヨコハケ（板ナデ風のものを含む）が少量残存し、断続ナデによる貼付後に板オサエ整形を施すⅡ群無調整突帯の存在（Fig.1-5）が確認できる。この点は、両者の埴輪の年代や生産集団の親近性を示唆するものとして注目されるが、詳細な比較のためには狐井城山古墳におけるより良好な資料の獲得が待たれる。今後の調査の進展に期待したい。